セブ島に学ぶ

東洋大国際地域学部研修から

＊10＊

報告者
国際地域学科3年 伊藤 裕輔
同 山本 路子

伊藤裕輔さん

山本路子さん

国際支援の理解浸透

昨秋の学園祭 フェアトレード実施

（本連載の第7回を参照ください）。

学んだことを実践

東洋大板倉キャンパスでの2008年の学園祭は、11月1、2日に行われ、多くの人でにぎわいました。子島ゼミはキャンパス内の大食堂に「フェアトレード本舗」を出し、ゼミ生とボランティア学生の数人で販売にあたりました。

今回は、「学んだことを実践につなげる」ことを意識して、夏休みに研修で行ったセブ島中心の商品構成とし、生産者のコミュニティーや団体に関するポスターを併せて展示しました。つまり、スラム住民が参加するコミュニティー開発に、私たち自身も「参加」しようという試みでした。

どの商品も好評

研修中に仕入れた商品は2つあります。どちらも調査を行ったバランガイ・ルスというスラムの女性たちが作っているものです。「多目的生活協同組合」のジュースパックで作ったリサイクル・バッグは、バッグ自体が軽いにもかかわらず、女性たちが一つ一つ丁寧に作っているので意外と丈夫です。今回は、あくまで商品を知ってもらうことを目的とし、1個300円にしました。男女、年齢を問わず多くの人に買っていただき、60個も売れました。

「メガマム」はまだできて1年という新しい団体です。こちらからは、ネックレス32本を仕入れました。一部は、お客さま自らに作っていただこうと、未完成のものを依頼したのですが、うまく話が通じていない部分があったかもしれません。ビーズの穴に紐が通らないものがあり、作れませんでした。ただ、自分たちで作業をやってみると、バランガイ・ルスの女性たちが大変な作業をしていることが身にしみて分かります。フィリピンの女性の苦労をお客さまに伝えることで、完成品の19個を売ることができました。

これに加えて、やはり研修時に訪問した「南のパートナー」のドライマンゴーも販売しました。このドライマンゴーは、神戸大の学生さんたちが立ち上げた「ペパップ」というNGOが輸入販売しています。そちらから30個仕入れたのですが、試食も好評で完売しました（ペパップのHPから購入可能です）。

研修報告としてはバランガイ・ルスというコミュニティーや生産者団体の概要、メンバーの生活、そのほかスラムの住居、水、ジェンダーに関する説明や写真を展示しました。読みやすくなるように工夫をこらしたかいがあり、多くの方に足を止めてじっくり読んでいただきました。まだまだ改善すべき点は多くありますが、NGOやフェアトレード団体からの委託ではなく、実際に現地で買い付け、生産者の様子を伝えるという試みは、子島ゼミ初の試みであり、その点でも前進がありました。

ジュースパックでできた商品を紹介するゼミ生

学園祭での販売（中央が伊藤さん）

フィリピン以外では、「第三世界ショップ」のコーヒー5種類を、それぞれ一杯50円で販売しました。食堂で休憩しているお客さまに好評で、こちらも完売しました。毎日コーヒーを飲んでいるという愛好家の方に「このコーヒーどこで売ってるんですか？」と聞かれ、カタログをプレゼントしたときは感激でした。ただし、電気ケトル1個で何杯も作っていたので、長い時間待たせてしまったり、誰がどのコーヒーを注文したかわからなくなったりしたのは反省点です。

活動に手ごたえ

この学園祭での販売は、学生や地域の方にフェアトレードを知ってもらう良いきっかけになったと思います。特に生産者の暮らすスラムの状況や生活の一端を紹介できたことは、「顔の見える貿易」としてのフェアトレードにとっては重要なことです。

実際に商品を手に取ってもらいながら、説明を熱心に聴いていただけたことはとても励みになりました。販売していうまく説明できない点もたくさんあり、歯がゆい思いもしましたが、ほぼ商品を完売したことで手応えを感じました。これからもフェアトレードをもっと多くの人に知ってもらえるよう、活動していきたいと思います。

最後に伊藤のコメントです。今回、初めてフェアトレード商品の販売に取り組んでみて、作る人、売る人、そして買う人が「喜びを共有できる」仕組みであることを実感しました。私が何よりもうれしかったのは、「欲しいものを買うと国際支援になる」フェアトレードに、お客さまが喜びを感じてくれたことです。

実際には、縫製が悪くて販売できない商品のチェック、広告やポスター作り、お店のレイアウト、経費の支払いや売り上げの管理など、販売だけでなくその前後にもかなり手間がかかり大変でした。しかし、お客さまが笑顔で買い物をしてくれたことで、その苦労も報われたように感じます。この達成感を忘れず、さらに活動を続けていきたいと思います。

（おわり）